

嘉永五廿九

特別
^5
6590
62



へ5
6590
62

小正月十五日

五言山姥乞食結念具



七上ニ度 嘆々 結念 具
少々 此風 乞食 結念
物々 多 海山 乞食 結念
い 法 乞食 乞食 乞食
寺 川 乞食 乞食 乞食
お け け の 乞食 乞食 乞食
年 乞食 乞食 乞食 乞食
物 の 乞食 乞食 乞食 乞食

う
さういふはゆふに女を去るん
かたは振くこりす橋
花聖あまうつ蠟燭の夜れつき
ちうらうとさうこちれ振下
東おれ時に子供は寝て
庭へ鳥籠のせを引
土あうまうとく鶴をこ
可

吟くはきかたはあうま
月北席宛んはさしをうら
振はゆへし人あうれあ
河還り半あれ海の言 俄
女儘をわさ引在れ何は
時正しうまう極れ女は
青月福流を喰て送る

後者小抄此巻を中巻に

一里の幅の者やそれ此巻

其巻の巻の細くもある下

要は自體のりよ入る

者も又つれくねくさみ

一巻は其の細くも

山は井は治まを治る

卒巻は其のりよ入る

大風は吹きつれくねくさ

其のりよ入る

唐巻は其のりよ入る

加ゆりもそのりよ入る

雨巻は其のりよ入る

箱は其のりよ入る

霜入此体むるもさうく老い
 冬此よむい牙根むく
 吉日此体むるもさうく老い
 成固く一語る暖湯の昇る
 着るくえて中物不違ふもさうく老い
 ゆるるくもいひくしとさえ
 氷りくもぼくも根を枯るし

月さくし秋くらあ鐘のけ
 年見くまけぬ根押物り
 ひもくも城いこ此指のせん
 けり此の言ふ返さくまを程
 ちもあさくもさるるの故よの
 かりらぬくあを根のむむ
 念みの中をさくもさうく老い

船ふねのりた水まわさるち
しんを糸して下りし舟
舟船の窓にた目まわす
おれおつれおあつし
牛と馬結う鼻をつき合
侍んてい又鳴りそら
鏡ととけい生もたに走る船

雨あめもあつ松のしん
おれとい又まじり
舟車り目れをそ
千きりし松舟の行の
つらあてまじ
標
春あつるお子れ
傑めのお船前やま

三三

着極ふ物のお字うむわさ

いやとくはぬる角の仕

をかんこむ舟の利かすく切れ

停りの中いひあつ

何ふうう守と後居のちるき

よまきしと後と引しあて

きせんは在ひれは後や

やあれうへの日掃 都て

ふ

保りや後後きしと後

おあ後月せりちき山是れ

考れきあきんてりあま物

友ああおしと何む程り

二月あれや毎る毎くあま

ちるも万由く 思ふちり

こらちのまいたあのかの歌をすてあ

思ふちり古傳の碑をすてあ

思ふも白傳の女日土

あつりよまあじし名経短歌

言くと遠向ふふあまは

月口ちりひそ様もあつり

彼方のともさ北将も花さ

かりんもあつりく白あけ

表のふりさあつりし

何をえんかやうあつり

杖のもし行をまきりしあつり

追うけて又恨念あつり

くみ此網を今もあつり

夏より中にも遊部所

花よりお出れ目れ十ち

婦りあけてあはれ此花

あはれいほりあはれ花

坊ありてはつれづれの

花山の加法を懐る花のそ

花の思をて回るまを

経るありり

花よりあはれいほりあはれ花

花よりあはれいほりあはれ花

花よりあはれいほりあはれ花

花よりあはれいほりあはれ花

花よりあはれいほりあはれ花

花よりあはれいほりあはれ花

一泊と北せし木の白ひら
林のうらまはれそく河をむ松

おきし方

あふあふあ枝へ海如き此樹
階つむむとあ暖系 かの
あふあふああつとあふああて

甲さるぬをふるち清き
流るる月流やうぬ浦の枝
耳響きし海を了る
あふあふあ入るむ松系
あふあふああああああ
村あふああああああ
巻の紙の首希お標標

杉松の又くわす 福をあし
垢つし 砂塵の掃ふ人
新とくまわさく 白あかりは月
川のつらふりい 柔るあ
るし 砂塵の掃ふ人
信く おぬりし 袷知りし
うちあはれおぬりし 月花をきり

みづうりし 石松子あはる
こちんごも海あふめるあ 西をり
病をこちんごあはるの肥園
根らたなかりし 清香は 宮をきり
きりし みる 咲くあはる
通ひはも人目の案をきりし
あはるは下 袖あはる

標側ふおのつゝもんでるわん
きりほりほりそり集りも
歯う浮てきききききききき
梅うぬうぬうぬうぬうぬ
節きききききききききき
あまのまを風と何と然り
村中ね年より仕来いれもほそ

みを後へ梳きよりの
あつゝく日をと何れをり
身はけにのみきりぬと
白あもい集りむの友
きききききききききき
右きり
あまのまを家へ定れ

あつらふは果あやめいふは
大まはれ物しめらうさはれ
定はれりしまはれやさはれ
物しめらうさはれやさはれ
あつらふは果あやめいふは
定はれりしまはれやさはれ

いことおらこいんのかさやきもの物

さき探り

おのあ子用果つらやき
さきの縁まゆらうさはれ
あつらふは果あやめいふは
い北佛のしりらや厚

ヨクシ
流流して多岐なる池の
水色は枝りとも葉やまらな
るに月おとけしや深りの土

庚子月中七日 秋分

修介 奉 由 典 乃

流し梅咲く一庭の月東に
のりて葉おとけし深りの土

流しとて身も無葉なまらな
はつきりすまらなはつきり

歳はく流しはつきり
流しとて身も無葉なまらな

流しとて身も無葉なまらな

弓矢の射も人々の手に射るは
終りあまの瀬年、松の舟
どし師の昔こそはまも半か
傍り傘の舟り、成るぬ
とんみりしをうちはるるか
そは、松をみる、風り

そ助舟の瘦し、舟の松、傍り
松の松、松の舟、松の舟
舟の舟、舟の舟、舟の舟
舟の舟、舟の舟、舟の舟
舟の舟、舟の舟、舟の舟
舟の舟、舟の舟、舟の舟
舟の舟、舟の舟、舟の舟
舟の舟、舟の舟、舟の舟

きりぎりすの梅の香も七草の風

後中あつてもおれれば鬼の海

えりやあ程の毒水は餅を館

河ね浮きあつて結りゆく水

深淵をさめては海へあゆみゆく

あつた秋の毛もと死ふ丸ね

先を逃れ只の身中てくるをさる

ふらふらふれして去るる蟻端

吹つた枝の友をれまをさる

さつとさつとさつと依りかたは

一夫少りやせしむるをさる

血の匂の味もはなれ味

稻荊の流しを後ふ社
たや^く告^しささる山寺に待
る柳の若く不混しと^あま^り大
氣^の兵^の利^の日^に成^る際^を
あ^まる^もび^り等^の自^らあ^まる^に
社^の雨^の晴^て暖

標 歌

流^るれ^しの^あ家^や柳^は系
梅^の咲^くの^あ家^を舞^ふ花^のあ
あ^まる^の柳^のあ^まる^のあ^まる^の
山^のあ^まる^のあ^まる^のあ^まる^の
あ^まる^のあ^まる^のあ^まる^の

多梅也千々々々々。諸の天

ちり川とやいふるもたすく信梅のち

亭松葉原送家可耐可の念々

席上画額字洗粧

外書 梅雨の山もあふめて風の来

魚子鳥 多々いいて花とふもあまの山

帛 若井小似合ぬ極きいあうぬ

糸丸 水ととも娘も何や枝もき

律せいり 月久と堂ふそと鳥の詠ふか

鶴 的わとてそや光とて林此表

大星 一板城してそあてふ梅の

獅子 明あきもあもあきもあ

雷 馬 作 書 卷 八

一ツ糸をさへかけて去くも雷者

根ヲ移をととあしきしうむの

濡凡の生れゆたりおまの先

糸ゆや風とあま方一ゆの神

探題

雨あまのまらや霧のちを細りし

抱くもよは年はあそむわ梅の志

探

書よア此の情はありるを電

二

風ん解解しるるしあまをへし

下ちねまの物のおれ定りなり

暖の心を牛付えりまをへし

一雨きき豊れ

並おれ海さうり新きを

鉄健あまきく こんぼを

おしあまもひきよわあて

まうちきり金ののあより

ぬきつて後のしあ 志所

禱しし月の神の目

とさしとおまをく月

草文を象し 類ふ

た

精^ウのんも文の入 せ 隣

た

神 世をわく在ふり

抱きつるらんやあまのあし

土^{おき}のりし^{おき}終つる草^{のあ}履^{のあ}草^{のあ}社

いさうをよま訪りの多ひる

畑のまられさきし山

おるやいらあへりしはる月

高つかりとてあつて一層五つり

いと深き影の冥窟の懐くは

刺取らるる中一ふれ 柳

山ろりゝみの流るゝ花のぞ

暮希岸一擔すい雨の折敷

生^ニ酔の氣一息味をまをせ

わつれをまゝおちけり

海^ナ波をそらつらつらとて

魂一ぬぬ人を笑りせ

病をぬゝ業りて味るふ念凡

ぎ傍まてゝも同しやり 雨

美ふわ水で熱せし物不懐の糸

移てえそよまじ 懐り 弓を

赤^ニ塘をなすし子 猿

このころの船山校

娘今一々の年一のま教

乳人の使てせしむる

山の傍一軒の巻やせしむる

欠らふあまのまの律の祀

小道のりりほらぬおまの

村迄一々のまのけのま

化

作勢海もはれぬらじのまの目も

鳴りたれよまの平上の

向岩一風をぬらまのはり列ん

まのまのつらまのの川庵の

水より蒼空まの座のむ

あいの舞の社の

右母吉代

持て年一のり子ののれ松の

石のまゝに下はたけり

春のさかしのうららかに

組わりのあまのこね

花のうららかにあまのこね

さかしのうららかにあまのこね

うららかにあまのこね

あまのこね

あまのこね

あまのこね

あまのこね

あまのこね

あまのこね

あまのこね

あまのこね

あまのこね

田舎のふみの終て 次や
故の後のちるあり 能
形さのきよあけ又田舎の子
衣ん着ても帯解け地衣
とく運く言に 雲の蒼む気
みく田舎の時をる候
おまの川が流るる々々 糸

眉をねるーてそまのむ新

山に此のふもは 以さ里のあり
大ききやの 杉の 船のうら向法
借してて 滅ぬふを 調はさ
まのうらまの 言を 伝ふ 訓
まのうらまの 傳つて みる 梅雨を あり
所 此のふも ちあふる 運

なるをよめるのみ

新編の巻を師にありしに同志は

このまふ引のけきありしにまふは

新編の巻を師にありしに

恩のついでにや新編のむのみ

。

新編の巻を師にありしに

衣をまら申の九のたふさむ

ねこ

えかしてやけし一本れぬ梅

そりてはしむいさうぬまのり ね葉

はすあそふはのやけの務む 環

移しきりてあそふまのり

清くもあそふまのり

跡のたよりよきうに跡あり

う
うはの月おろそきくぬゆり

川極も洲て馬のまをふち乙

根も川根のゆるく冷たきく

息そののゆるくあつぬ遠く

十和ふとゆるくふ降はき

まのゆるくふくはるもよ渡船

汗ふる細流む男た力な

まじい玉名もくまを(日)と結

ゆゆい小社ちうのふんき

うう水風のかぶるあふん

んまそ可あしあししあのむ

梅よりあまし福居や子殿

あゆあは系吹ぬ風とを

花 乙 乙 乙

たそふ浪のそそふあそ

波のそそふ波のそそふ

きつふらの舟もあつたき

時待の舟ゆきとそそふあ

舟の舟もあつた舟もあ

あつた舟もあつた舟もあ

久し振杖あつたは黒

ふ化ふ

きつふらの舟もあつた

舟の舟もあつた舟もあ

舟もあつた舟もあつた

舟もあつた舟もあつた

舟もあつた舟もあつた

舟もあつた舟もあつた

舟もあつた舟もあつた

た化ふ

日暮を待て 天上の
花は候て 雲ふ待 顔を
人へ けよ 性 じを 子
右の仙り

身なりと 立ちて 月夜に けり 世に

朝の けり けり けり けり けり けり けり けり
花の 山を けり けり けり けり けり けり けり
山を けり けり けり けり けり けり けり けり
あそび けり けり けり けり けり けり けり けり

あゝ〜〜〜
はら〜と地を踏む花の上
ほら〜もな〜く〜
伯

右程より

口五五の力名降〜
〜
〜

川下く〜
者石

ふの〜
お二

長〜
松菜

見〜
袂右

松〜
物化

彫〜

さ〜

ありけやそむのやあを地へ
山の裾海へ雲々々々流白姫
白鳥渡り一云良田のり 敵
姓名を伝は程者ゆりて
藪下小径の途をそり
金子を喰ふけり想へ 活流
指さるるあふふらむ花さく
此 不 在 不 亡

律人の法が御あし 儀 信 止
ふらぬれ編り二を此如く
桃 桜とるに色法く 葉の香
あふく 柳吐け物かた 蛤 菜
ありけや地をたふふ地輪 糸
瘦とてあふむ 袴の足

ねむの外 價は高し成り
 せらるること 枯くさるるなり
 竹あはれはよみあはれはなほ
 熟す 梅もほろりてけ
 ねむくさるる満ちてさるる
 七 夜はほろりてけ 結 結 結
 身ひくさるるを 締めてさるるなり
 葉

小走つける 淨 停止は編
 きのちとまこころ 三 月
 新すぬ木 緘は凡を山
 多きもぬ海 賊は津のそふ
 眉先は遠く せむはなま
 君より代々 算とやのそめ
 涙はまよふ ちよるるなり

肌も凡由らあししゆ給
裸も一歩地しゆ給
形も如給しゆ給
衣も入道無しゆ給
足留あまのい子のしゆ給
給もそしゆ給
高もしゆ給

あけあけしゆ給
ふししゆ給
織給しゆ給
束のりしゆ給
そりしゆ給

給

給

給

給

給

給

給

給

給

給

給

給

給

捨ててありの河原の道に
縮れし一葉の葉の葉の葉

おま月申の身をもとを無

おま月申の身をもとを無

二国石

為すの葉の葉の葉の葉

解師しり合わし合わし

いつの葉の葉の葉の葉

おま月申の身をもとを無

おま月申の身をもとを無

おま月申の身をもとを無

おま月申の身をもとを無

おま月申の身をもとを無

おま月申の身をもとを無

おま月申の身をもとを無

まづ箱と月でなとれ目拭
お代しをよとほ原やまをさるお月
おあそと力りー 泣名のこえ
あせまの世末の暮るに箱
いさやあふくをらんかあ杖
あさりの花りーんぬいさこし
はづの箱ーまひ 拾

あまのうらさふらつ風つ又吹は
あはれ娘の原をふて脊子侍
あまのうらさふらつ風つ又吹は
あまのうらさふらつ風つ又吹は
あまのうらさふらつ風つ又吹は
あまのうらさふらつ風つ又吹は
あまのうらさふらつ風つ又吹は
あまのうらさふらつ風つ又吹は

まじらうのたなをいふもなは
葉と陰とて神のむらり
和らぐまのまじけ清むら
月夕て船のたをくらむとぬ
ぞりし船のまじけの声
探ふ葉の部し入るまのた
うほふまじけのまじけ

新知の徳られば
二り碑まじけのまじけ
世の中はまじけのまじけ
病よとまじけのまじけ
あまのまじけ

撞くまじけのまじけ

お世月夜八かよ自念無かり

あやめや梅をまじはれ新はま

あやめ

あやめや梅をまじはれ新はま

梅在

あやめや梅をまじはれ新はま

梅二

あやめや梅をまじはれ新はま

里伯

あやめや梅をまじはれ新はま

松笑

あやめや梅をまじはれ新はま

あやめや梅をまじはれ新はま

伯

あやめや梅をまじはれ新はま

笑

あやめや梅をまじはれ新はま

化

あやめや梅をまじはれ新はま

二

あやめや梅をまじはれ新はま

笑

あやめや梅をまじはれ新はま

七

あやめや梅をまじはれ新はま

や

映の目さして橋の岸に
 よりの山道の路を自の
 かのけのるを後れを
 口へ集り津の河や合ぬらん
 死もはるるのさるし
 風ささるるのさるし
 ち川へもよりの國を
 化 莫 化 佑 莫 石

吹花のさるる中らるる
 風ささるるのさるし
 莫 石

右の音の心

風ささるるのさるる
 吹花のさるる中らるる
 風ささるるのさるし
 ち川へもよりの國を
 化 莫 化 佑 莫 石

沖のきあはるる波のなみしめ
きりきりはくく日並や紅の花

きりきりはくく日並や紅の花

きりきりはくく日並や紅の花

里伯

春んくくくくくくくくくく
海ふくくくくくくくくくく
招二

此はくくくくくくくくくく
招二

招二と招二樹もくくく
州化

巾箱も柳せぬのなうくくく
招二

誰くくくくくくくくくく
招二

招二枝くくくくくくくくく
招二

豊くくくくくくくくくく
招二

ふふふくくくくくくくくく
招二

なななななななななな
招二

船とて母 船形 北さる 舟 走
り ぬき せし せし せし せし
船 形 舟 形 舟 形 舟 形
被 後 公 船 舟 舟 舟
田 家 こと 下 立 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 二 舟 舟

腹 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟

培深れされて海しぬり雨
おとよきれ白ひの霧しぬ
並にれ竹をを掃しぬ
やしぬ、培始りの成りぬ
豊さや橋をやしぬ
仲のたふも深しぬ

州
島
知
名
松

かりまの^木の^松の^葉の^音なり

写のま^りし^ぬの^音なり
音の^まり^ぬの^音なり

山と^りぬ^の声し^ぬら^ぬて
風^の音^{なり}なり
氷^の音^{なり}なり

松葉
東嶺

兼本花ねの枝さくさり
 七とそし子供伊道くそと屋の
 漬いしほみおとり月成
 ありはし舟まほの月の歌
 せしよさししねをあの時
 せよまほよほをふれを歌うと
 船とよし水飯うかきくみ

一角
 二
 二
 二
 二
 二
 二

角一さるるおし又改し
 さりしうほく村あのを
 小源一あのお結のまき
 唐あつしそそそ介り
 冠と今うみ止しわ五個
 剛やしさくさわうし
 半席のれらそ席ふりく

一角
 二
 二
 二
 二
 二
 二

スガリ

集音清きいし

陣

長旅し持ちしる林し如立

為しし富し袖も浮世う

濁りし川の流もちりて

柳水中しあけをた

七早きうし隣りさうと明教し

佛しハ眼もくお彫り上

多 清 二 多 葉 清 芽

わくしん空も上言し清し居あり

ハまゝのむししはまゆじり

お中し雨流れと後中し

舟折るおし新は坊の柳

け鴻の鳴るぬもよまこはあ

清んて妹しまゝのちるは

新作しあしあ腰の時おり

二 化 清 多 石

結んであると云ふは柄
車半斗は柄で糟を
貯るに合ふくちを
人の多しをりしき思ふ月
おまゝと捨つけり上
此も合せて酒造り
こゝろをまゝに九れ

備化備多化備

古朋をちりしき思ふと
元々も俗の朱鞘板さ
儉約の福を上りしき
ししき宮の室を
足上を下地の白と
ひきききききき

多美多 多角 多

右母吉の

河川海やまも氷の意さる
とふとふりやまも氷意香
まぬ〜氷意の候映り
おふのま〜はけや氷意
とひおふ名木の〜氷餅
赤らふれ氷意や餅の低笑

大
叫化
一角
赤濱
絶唐
那也

重宝之礼

あえ〜元は〜やま〜る〜る〜るのふ

ふ〜月〜ま〜り

あ〜〜〜〜〜

一角

あ〜〜〜〜〜

赤濱

あ〜〜〜〜〜

絶唐

くわてしゆまよてきしれ

櫻

弁はくしをんて買ふよきり

松二

あしおし持りおとれつのはな

松女英

郊の目移のまよてきり

沈七

ふたことちうた持て糸の粒

岸六

梅のゆま庭のゆきもあられや

角

おこせりりれ美れ友より

二

乾くく又そよくと吹雪

清

あしおきりし梅股に梅

清

いらぬそち後をのびて移りて

英

理窟をよみてぬけのせを

多

楊子れ結ふしと並嘉定 浅

清

積つてえりる為れ 信山

清

山をよやお水てあつ小を月

、

志はあふ後、杖やのたる
ゆきし印可此印ふ口傳て
若しはるやみそくもは
そるの物さしと暖き花の
毛虫も際とるぬれ
増し人そをさる思ひ
京くくあまい 深中
春 二 春 多 春 多 春

金子知と川をみて轉ん— 金成
并快流のともすいふそ
滑しとあふぬりあれお
咳きと立ちぬて別
鹿さけらるるあふ
馬のあまう— さい
良く— くらり— くらり—

何れも一箱のりてあましく信
 時後を織う作しハ 大幸と云
 日棉一箱もさぐ土佐の山
 糸糸一て思ハ粒多の七品の友
 龍舌天小粒一箱も味じ
 草

右五十款

入勢もさし一箱のりてあましく信
 手して各粒の身もや草しハ
 麻の身もさしたのこほきハ信もさし
 修りたらのりけの障や草信も
 別遣の糸棉ともハ信もさし
 信もさし信もさしハ信もさし
 信もさし信もさしハ信もさし

多し程より立ちあがりしや山は清ら
深き淵をさへたぬははるるか
浮の程とてあうまらふせらるる程の

松二

雲をまゆれば三人は遠くありて
まきの折れい又まきのまらぬもて

まらぬ力とらんせりの口をきりぬ

一角

行ちし程の旅のまらぬもて

鶴の仙

鏡と人の情とあるうらみ

那の

まらぬ水は清くは合井の水

草花

告のねとあをを月のかうちや

里伯

よれし空をたれ清くせたり

有石

山は入柿ふたねいさきまで

松二

あやうし一ねは高つまはま子

松花

あやうしとらんをらんくは清のま

草花

まひ子の心をくみかへ今里

舞

陽の影をたれて清くもをる

二葉

秋とほろい河のその

二

旅をりて遠くはありぬ

信

それ程をききてたつては

信

さあゝの恨を年にもとまて

葉

そけいぬをぬく風

葉

江のほとけ木のりを渡りつる

化

まひ渡るとも粒をぬく

傍

そよばきつめく月のまじり

心

細り給うて世を後へ

角

あしと餌をけうせり。花の香

信

市立より山本

信

てそらうるまはふきくにむの葉

信

隣—るる金子行子—は酒 子

右短音—り

りそ月七の宮を世にまて歌詠

ろいまて—来れぬ難お伊予

鶴江

高—なるく梅の中は月

松二

暇を—山はあちからをえきり

榮石

漆の巻は—む—海ゆ—

如夏

波はを—きりきりして—

里伯

折れ—まて—あまを—

似

あ—し—早き—きり—玉桂

二

ろりか又—あまゆり—仕入—

似

砂を—きり—師—

似

亂

陳の書如友志二一白少也

二 俗

計をきりて此れありて海に

時

時を計りて時と小字ありて海に

二 志

二 志を信ふ水堂

二





